

サドル経済理論の今日的意味

白 川 勉

ムハンマド・バーキルッ＝サドルはそのイスラーム経済理論を展開するにさいして、経済理論と経済学という2つの概念を明確に区別し、各々を次のように規定している。

ある社会にとって経済理論とは、その社会が経済生活を営み、問題を解決するにあたりそれに従うことを望む方法のことである。また経済学とは、経済生活やその諸事件、現象、あるいはそれらを生起させるさまざまな原因、要因との関連性についての解釈を得る学問である。⁽¹⁾

イギリス古典経済学の巨人的思想家ジョン・ステュアート・ミルは生産の理論と分配の理論を峻別し、前者が技術的な自然法則の性質をもっているのに対して、後者は人為的な制度のいかに依存するルールにすぎないことを強調した。⁽²⁾以来、生産に関する学問的法則の発見と、分配に関する体制論とは独立した領域であるという前提のもとに、経済学と経済理論の分離が進んだのであった。結果として、資本主義的枠組の中で発見される種々の学問的法則があたかも体制の如何を問わず普遍的に適用しうるかのごとき誤解が生じ、また、生産の問題は体制理論において捨象されるという傾向が生じたのである。

サドルはこの種の経済学と経済理論の分離の危険性を指摘する。両者を明確に区別し経済問題を論じることが重要である。しかしそれは決して、分配の問題を経済理論として、また、生産の問題を経済学として論じることではない。本来、サドルによれば、経済理論は社会的公正という思想に関連する経済生活上の基本的な規定のすべてを含むものである。他方経済学は、既存の思想あるいは公正さに関する理想とは切り離されたかたちで、経済生活の実状を説明する見解のすべてを含んでいるのである。⁽³⁾

構築された経済理論に応じて、その上部構造としての法が形成される。経済理論が法に影響を及ぼすのである。市民法における個人的諸権利の規定のあり方は、下部構造としての経済理論の社会的公正に関する規定を反映する。経済理論と経済学、そして、経済理論と法を区別した上で、サドルは上部構造から下部構造を再構築するという手法をもってイスラーム経済理論を提供するのである。

アダム・スミスの自由放任思想に立脚する経済理論は、ケインズによってその終焉が宣言された。大量の失業者の出現に有効な処方箋を提供できなかったからである。さらに、ケインズ以後の経済理論もインフレーションと環境汚染という2つの大きな問題を前にして公正の理想実現に関して不備が指摘されている。また、資本主義理論家たちの試行錯誤の結果である公共経済理論は、市場万能主義を批判したものの、財政赤字の拡大という現実の前に支持者を失いつつある。大恐慌に続いて、現代は第二の危機といわれている。それは、社会的公正を実現しうる資本主義経済理論が不在であることへの危機意識である。こうした状況はサドルが指摘するように、ミル以後の経済理論が専ら分配の問題のみを扱ってきた結果なのだろうか。もしそうであるとすれば、科学的思考の対象として従来体制理論と切り離されてきた生産の問題を、もう一度、経済理論の対象に組み込んでいくことが必要となってくるであろう。そのさいに、サドルのイスラーム経済理論がわれわれに提供する、生産に先行する配分理論、そして生産に関する理論は今日的重要性をもつといえるであろう。

2

アダム・スミスの経済理論は自由競争を讃美し、市場システムの自己規制的メカニズムが資源の最適配分＝社会的公正を達成すると予言した。産業革命の黎明期にあって急速に拡大するであろう市場経済を見通し、分業と交換の発展

に力点を置いたのである。現代資本主義社会の下部構造は、このアダム・スミスの『国富論』によって原型を得たのである。

このスミスの経済理論の底流には明らかにホッブズの人間観がある。ホッブズは利己性を人間の本質にとらえ、戦争状態にある故に主権者と契約を結ぶことによって国家をつくったとする。スミスは人間の本質についてはホッブズと同様にとらえたが、個人の利益の追求が市場を通じて公正を実現するとして政府の干渉を排除しようとした。しかし、このホッブズの人間観はあくまで市場的領域においてのみ公正を実現するという意味合いにわれわれは注目しなくてはなるまい。一方で飛躍的に発展するであろう市場的工業化社会を予見しつつ、他方で非市場的農業社会をスミスは無視しなかったからである。

非市場的領域での公正の実現は、誰のものともしがたい共同的富を個人に保証して分配するところにある。共同体生活に必要な富は市場における競争論理とは区別して取り扱われなくてはならない。スミスはその点を自然を2種類に分けて理解することによって示唆した。無機的生産（工業）における死んだ素材としての自然と、有機的生産（農業）における生産者としての自然である⁽⁴⁾。必需品としての食料は人間と土地（自然）の共同作業によって生産されるものであって、共同体の共同的富である。スミスのこの文脈からは他人が当然保証されてしかるべき富をも自己のものとするという無制限な所有は許されない。しかも、生産者としての生きた自然を分配の対象とすることにはならないといえよう。スミスの経済理論は次にまとめるような特質を有していたことをわれわれは再認識しなくてはならないのである。

- (1) 市場的領域と非市場的領域の区別が存在した。
- (2) 市場的領域においては人間の本性を利己的にとらえることは何ら社会的公正の実現可能性と矛盾しない。一方で、非市場的領域においては社会的公正を実現するために利己心の追求は制限されるべきであるという暗黙の了解が存在した。

- (3) 生産に関しての理論が存在した。そこでは自然は単に人間の生産活動の素材としてだけではなく、人間と共同して生産に携わる生産者としても理解された。

スミスの『国富論』が市場的資本主義経済理論の原型であることを疑う人はまずない。しかし、スミス以後の理論的展開は、前述した3つの特質の全てを十分に認識したうえでなされてきたといえるであろうか。市場社会の急速な拡大に伴って、スミスの非市場的領域に関する部分は捨象され、同時に自然は無機的生産の素材に封じ込められてしまった。そう結論することは予断に過ぎるかもしれない。しかし、富が交換価値としての側面だけから理解され、土地と労働が商品として扱われるという理論展開を見るにつけ、そう判断せずにいられないのである。

3

本来生産者の側にも立ちうる自然と、個人に帰属し続けるべき労働の商品化は、すでにジョン・ロックにおいて用意されていた。無制限所有を認める近代所有理論は2つの意味で重要な位置を占めている。ひとつは、下部構造としての経済理論のスミス以後の展開に。そして、もうひとつは、自由主義思想の市民法への移入にさいしてである。

自然法思想の体系の中にあつては、個人的所有権はその制限によってのみ権利たりえるものであつた。すなわち、資源の希少性の認識にたつて、生産においては個人の労働可能性が、また消費においては生産物の損傷性が無制限な個人的領有を制限していたのである。この考え方は、スミスの非市場的領域での公正の実現という観点に生きていた。しかし、近代所有理論は、労働と資本の分化を認め、土地と資本の無制限な所有を肯定した。それを万能ならしめたの

が貨幣の役割評価である。

個人が生産しうる以上の生産は、個人が生まれながらにして所有する労働の処分権の合理化により可能となった。契約による労働の処分はとりもなおさず労働の商品化である。契約にもとづいて労働を購入するものは、その労働による生産品の所有権を主張しうる。そのようにして所有された、個人の消費能力を超える生産品は貨幣に形をかえ、その非損傷性ゆえに余すところなく土地と資本へと転換されてゆくのである。

近代的所有理論が市場の拡大とともに正当化され、結果として市場的工業の原理を非市場的農業に適用することを正当化する契機となった。そこでは、スミスが示唆した非市場的領域においても、ホッブズの人間であり続けることが公正を実現するとの誤解が生じたのである。

下部構造におけるこうした理論展開に伴い、上部構造においては社会的不平等感が民主主義思想を生み出す原動力となった。もともとスミスの理論は上部構造に対し自由主義思想を市民法に組み込むという影響を与えた。しかし、それはあくまで限られた人が市場に参画する権利を有しているという市場社会においてのことだったのである。市場の原理が非市場的領域にまで通用されるようになった以上、社会的公正の実現は片手落ちにならざるを得ない。上部構造においては、不平等の解消が急務となったのである。

マクファーソンは現代の西側諸国にみられる自由主義的民主主義について次のように述べている。

『(これら自由主義的民主主義国家は)最初は自由主義的で、かつ市場的立場をとっていた。そして、そのあとで民主主義的になった。……この国家の機構は非民主主義的な政党であり、またこの国家の目的は競争的・資本主義的な市場社会の条件を用意することであつた。自由主義国家が民主主義化された頃には、すでに、民主主義的諸勢力の要求は競争に加わるということであり、それを捨てて何か別の種類の社会秩序を求めようとした

ものではなかった⁽⁵⁾』

上部構造で求められたものは、等しく市場に参画する権利であった。非市場的領域に目を向け、市場原理を適用することの不法性を訴えかけるものではなかった。このことは下部構造におけるスミス以後の理論的展開を正しく反映している。それでは今日に至るまでの資本主義経済理論の展開は社会的公正、人間の福祉を実現するための枠組を用意し得たといえるであろうか。もしそうできたといえるとするれば、近代所有理論が是とした無制限所有は経済理論として充分機能するといえるであろう。また、近代所有理論がよって立つ労働と土地を商品化するような思考法、すなわち、交換価値として富を把握する思考法は正しいものであるといえよう。しかし残念なことに、答えは否定的たらざるをえないようである。

4

サドルの経済理論は社会的公正の観点から複合的所有の原理を説く。そこでは決して人間の本性を利己的なものとは理解しない。また生産に関しても単なる素材として自然をとらえるようなことはしない。所有権移転の法則の中には、人間と自然の生産への関与の発想が明確に読みとれるのである。

サドルの経済理論はわれわれに改めて、資本主義理論が捨象してきたものに目を向けさせる。スミスが非市場的領域で暗黙のうちに前提した非利己の人間観と、生産者としての自然観である。そして、それは同時に市場的領域におけるホッブズの人間観と素材としての自然観に再考を促すのである。ケインズはスミスの自由放任に引導を渡したが、くしくもスミス以後の経済理論の展開にさいしての道德律に関して次のように述べている。

『富の蓄積がもはや高い社会的重要性をもたなくなる場合には、道德の掟にも大きな変化が起こるであろう。われわれは、200年にわたってわれわれを悩ましてきた偽りの道德原理のうちの多くのものから、抜けだすことができるようになるであろう。それらの原理によって、われわれは、人間の諸性質のうちのもっともいまわしいもののいくつかを、最高の徳の地位にもちあげたのであった。』(ケインズ『われわれの孫たちにとっての経済的可能性』⁽⁶⁾)

現代の市場的資本主義理論は有効な公正実現への方策を提示できないでいる。一方では非自由主義的民主主義とマクファーソンが規定する発展途上諸国家では、人間の権利と人間的自由と平等が市場社会では得られないとの指摘がなされる。生産の問題を科学的に分析しうるとして理論の対象から除外し、自然をあくまで人間に隷属するものとしてとらえ、しかもさらに人間の利己心が最高の徳とされる。このような市場的資本主義理論に対してサドルの経済理論は一石を投じるのである。それはデカルト的世界そのものへ向けて投げられた石といえるであろう。

注

- (1) Baqir-ṣ-ṣadr, M. Iqtiṣādna Beirut, Dār -l -Fikr, 1968. (黒田壽郎訳『イスラーム経済論』1985年) P. 377.
- (2) 熊谷尚夫編『経済思想と現代の世界』1976年、日経新聞社刊、9頁。
- (3) Bāqir-ṣ-ṣadr. 前掲書。P. 381.
- (4) 玉野井芳郎『エコノミーとエコロジー』1978年、みすず書房、7-11頁。
- (5) C.B. Macpherson. The Real World of Democracy. 栗田賢三訳、1967年、岩波新書、136頁。
- (6) J.M. Keynes Essays in Persuasion, London, 1932, pp. 367 - 72.